

今月の山柳



郷土が誇る、歴史的遺産の岩戸山古墳。石人石馬の並ぶ別区は、緑豊かな自然に包まれた憩いの場所である。流れる雲の下、楽しく遊んでいた親子が、帰り際に埴輪へ、そっと彼岸花を手向けて行った。

八女川柳会 安達 昇

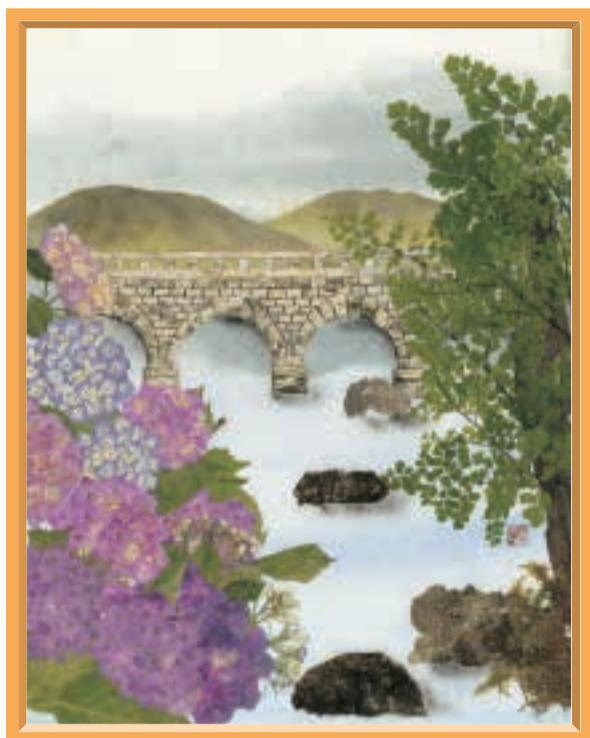
街かど gallery



八女市今福 松延 正子

子供の頃から花が好きで野辺に咲くレンゲ草やタンポポ等を本にはさんで押花を楽しんでいました。でも色あせてしまった花をみると何とか綺麗なままの花が残せないかなとの思いがありました。

そんな中、公民館での押花教室に参加し、その縁で伊藤先生やサークルの皆さんに出会い十数年経ちました。途中病気で休んだりもしましたが伊藤先生と皆さんのご協力でも楽しく参加させてもらっています。日頃は本や写真を参考に作



画していますが、この作品は初めて上陽町の石橋をスケッチに出かけて仕上げた思い出の作品です。また、押花を通して花好きなど夫と共有できる時間を持つことも幸せです。

今月の色

梨子色

梨の表皮の色。視覚デザイン研究所「和の色のものがたり」



リンゴとバナナ以外何でも出来るというのがかつて豊穡の地八女の自慢であった。特に夏から秋にかけては桃、西瓜、ぶどう、イチヂク、梨、栗、柿、みかんと次々に旬のフルーツが出回ります。記憶に残る小学校の運動会は、そんな秋に開催される集落あげての一大イベントでした。かけっこで転んでも、相撲に負けても、テントの下家族で食べる栗ごはんのお昼は楽しかった。食後は皮を剥いた梨と柿がきれいに並んでいた。そして甘いみかん。現在運動会は春に行なわれているようだがどんな昼食だろうか。

◆「今月の色」原稿募集。皆さんの心に残る色とそれにまつわる思い出を300字以内にとめて(株)東兄弟送送お送り下さい。住所・氏名、電話番号明記。よければ顔写真添付。

年を取ると

深町 準之助

還暦を過ぎると人はかんたんに年を取ります。難儀なことは何もありません。古稀なんざあ駆け足。喜寿ともなるとこれはもうよいい。どん！で決まり。むろん途中で棄権する人もいます。レースです。からとにかく年を取ると人は皆朝が早くなり朝が早いから昼も早い道理したがって夜の来るのもまた早いのです。九時には寝ている忙がしさあ、年寄りとは全くもって早起きのにわとりみたいな存在ではないでしょうか。ほら、もう床の中で、ごそごそ起き支度を始めています。チュンチュン 雀の賑わいにあわてて目ざめた子供の頃とどうです。どこか似ていませんか。

野鳥ウォッチング ⑧ カワセミ

川の宝石とよばれるカワセミ。川の水面を「ツウピーイ、ツウピーイ」と鳴きながら低く飛んでいます。魚を見つけると頭から水中に飛びこみます。くちばしが長く、すずめより少し大きい位です。年中河川等で見られ背は青く、胸腹は赤褐色をしています。矢部村 栗原 浩暢



籐編みによる籠作り

八女農業高等学校

本校3年生は、社会人特別講師招聘事業で籐編み講師森久美子先生をお迎えし、「籐編みによる籠作り」を学習しました。1本の細い籐から籠を編みあげていく実習は生徒達の興味関心が高く、時間が過ぎるのも忘れるぐらい熱心に取り組みました。先生は生徒一人一人に丁寧に指導され、籐の知識はもちろん、伝統的な籐編みという物作りの大切さを学ぶことができました。

(生徒の感想紹介)

●初めて籐を見たときは「長い細い棒みたいなのはなんだろう」と思っていました。触ってみると固くてすぐ折れそうだなあと思いましたが、水につけると籐が柔らかくなり折れなくなることを知りました。編み始めるとすき間ができ、2本ずつ上、下と編んでいく作業がとても大変で途中何回も先生に手助けしてもらい慣れると編むのが楽しくなり、どんどん籠になっていく姿を見てとても感動しました。普段できない貴重な体験ができました。

(立花中学校出身 近藤 ほか)

●籐編みの籠は祖母が持っていたり、テーブルの上にお菓子が入っているのを見たことがあります。身近な籠が籐という自然のつるで作られていると聞き驚きました。「私にも簡単に作れそう」と思っていました。森先生に優しく手直しをしていただき、立派な籠ができました。完成した籠は一人一人形が違い、手作りだからこそ得られる暖かみもありました。今度は一人で作って祖母や祖父にプレゼントしたいと思いました。

(黒木中学校出身 田形 朱加)



9月の校内販売所(みらい館)の開館日 1日(火)、4日(金)、8日(火)、11日(金)、15日(火)、18日(金)、25日(金)、29日(火) 販売時間は10時30分～15時30分です。多くの皆様のお越しを心からお待ちしています。

健康よもやま話 ⑨



姫野病院：松浦 緑郎 (健康管理士一般指導員)

●糖尿病

一般の学名で「糖尿病」は、Diabetes Mellitus といいます。前半の Diabetes とはサイホンのごとで通り抜ける、後の Mellitus は甘い蜂蜜という意味で、まとめると「甘い蜂蜜が体の中を通り抜ける」となります。もう少し厳密にいうと、血液に糖が溢れているので、それが尿にも現れるということですが、それにしてもこの命名はなかなか的を射ており正確です。



現在、わが国には950万人の糖尿病患者(予備軍も含めると2050万人以上)がいるといわれていますが、このうちの90%以上は大人になって現れるもので、インスリン非依存型と呼ばれています。これは長年、糖分を摂り過ぎたために膵臓が疲れ果てインスリン分泌が減った結果おきてくるもので、30歳を超えると増えだし、男性では50歳、女性では60歳以降でさらに増加していきます。

糖尿病になると、体の中をいつも甘い血液が流れているために血管壁は脆くなり、その人の年齢以上に動脈硬化が進行するようになります。目の網膜の血管が傷んで視力が下がったり、腎臓の血管を害して腎不全や高血圧を招きます。糖尿病の人は心筋梗塞にもかかりやすくなります。糖尿病ではそれ自体で死ぬことは少ないのですが、心臓や腎臓を害して、それが命とりになるのです。

大人にみる糖尿病の大部分は遺伝的な体質があり、これに甘いものの摂り過ぎや過食、アルコールの飲み過ぎが続くことで発病しますが、糖尿病の体質があっても食べ過ぎや飲み過ぎがなければ発病しません。つまり、日頃の食生活に注意し、太り過ぎないことで発病や悪化を防ぐことが可能なのです。

こう書くと簡単そうですが、食べ物が氾濫する今日、私たちを糖尿病に追い込む誘惑はあまりにも満ち溢れています。この多い誘惑のなかでいかに健康に生きていけばいいのか。もしかすると、糖尿病は、ものの溢れた現代に生きる私たちに「自己を律して生きよ」と神が下した罰と命題なのかもしれません。